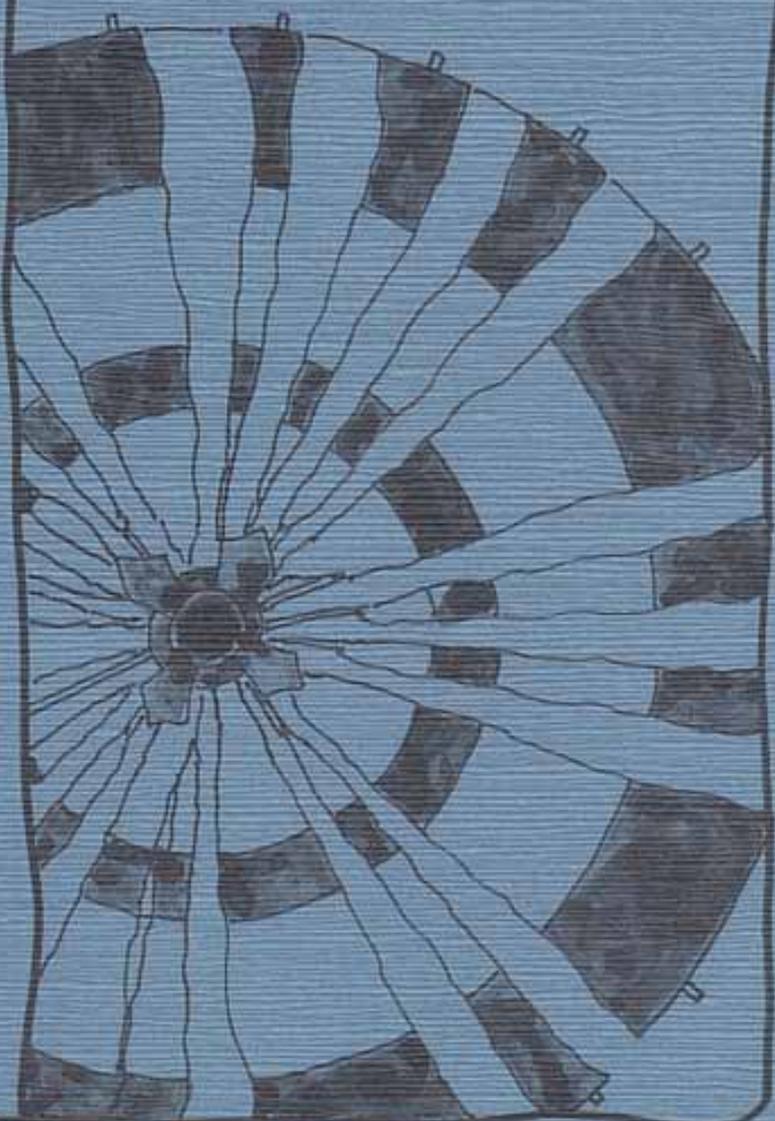


やぶれ傘

一一五号

二〇二〇年八月



大川の海月を橋の半ばより 根橋宏次

麦茶注ぐ修正液の生乾き きくちきみえ

ほのぐらき夏越の雨となりけり 大島英昭

清水汲むまづ右足の位置決めて 青谷小枝

ロルカからカミュへ蠅虎が跳ぶ 藤井美晴

てんとう虫のほり切つたる草の先 廣瀬雅男

雲海の下の街より登りきて 辻久保 勲

斎場へゆるやかな坂山法師 瀬島酒望

鏝阿寺の庭にもぐもぐ毛虫でて 白石正躬

凸凹の路の凹ぼたを行く蚯蚓 渡邊孝彦

カレートの香アガパンサスの昼下り 安藤久美子

曲り家の三和土に風や柿若葉 天野美登里

もの陰に翅とちてゐる夏の蝶 秋山信行

良き話に日傘くるくる回しけり 有賀昌子

梅雨来る心につもる雨の音 松村光典

抄 集 句 傘 紀 大 崎 選 夫

もの洗ふ蛇口いつばい開けて夏 武藤節子

用水に鯉水際に半夏生 森 美佐子

明易しトラックが出る駐車場 山本久枝

道問うてなほ真つ直ぐに行く薄暑 吉田幸恵

カラフルな一両電車梅雨晴間 浅嶋 肇

おほろげな母の面影粽食ふ 石塚清文

はんなりとした言葉聞く納涼床 稲田延子

良い方の声でママ呼ぶかたつむり 岩藤礼子

夏草の川面を覆ふほどにまで 神山市実

小雨降つて落ち着く田圃半夏生 眞田忠雄

花舗の灯の運くまで煮き夏に入る 高橋 均

メビウスの輪となりて死す蚯蚓かな 手島百合子

花びらのけだるき午後菖蒲園 貫井照子

梵鐘の響く卵の花腐しかな 萩原溪人

軽嶋の子の巣立ちて僧は池掃除 橋本美代

本郷美代子

句作りに子とドライブへ五月尽
むらさきの花器にカラーの白活けて
学校の子等の声無く栗の花
甥の葬悔しき程の梅雨晴間
風かをる社にややの宮参り
青蔦の格子に添ひて伸びにけり
かたはらに終活の夫汗まみれ

本田 武

ポストまでの五歩を傘さす梅雨最中
雨空やテイファニー前の夏柳
花菖蒲八ヶ岳麓より絵はがき来
垣越しの泰山木の花錆びて
毘沙門堂手水を使ふ涼しさよ
蜘蛛の囀に引つ掛かりぬる日差しかな
長雨や錦市場に鱧の皮

増田裕司

ここに咲く紫陽花の色未だ薄し
幼子の頬に小さき蚊が止まり
朝顔の蔓の絡みを見てゐたる
鎌倉の人なき寺に南風吹く
二夜目の螢を放す螢籠
薄雲の空に溶け入る梅雨晴間
蚕豆の終りも近し独り酒

松本善一

外側を剥がして箱へキャベツ畑
畝作りとてトマト苗ただ三本
休校の続く学び舎夏来る
ペランダで呑む自粛の日夏に入る
店仕舞ひ戸外に枯れし胡蝶蘭
露の皮再々放送見つつ剥く
段ボールに寝てる男の夏マスク

人影の少なき墓地の額の花
 戻り梅雨濁りしし川の鯉の群
 通り雨に濡れし参道大蚯蚓
 硝子戸に張り付く守宮腹白し
 庭先に落梅五六雨もよひ
 バスを待つ八十路の人の夏帽子
 生ビール画面の人と乾杯す

箕田健夫

全身を震はせ毛虫横断す
 蝸牛揺るる葉に身を委ねぬる
 花束のやうにパセリを渡されて
 枇杷熟れてひとつひとつに陽の匂ひ
 鎌ざつときてざつと去る雨花ざくろ
 水底にあめんぼの影つと動く
 もの洗ふ蛇口いっぱい開けて夏

武藤節子

姫女苑休耕畑に群れ咲いて
 紫陽花の真白に咲けり雨ががり
 草を刈るひと菜園のあちこちに
 湧き立つは千葉の辺りか雲の峰
 垣越しに犬の吠えぬる夏館
 晩酌に娘の料理胡瓜揉み
 玄関の鍵かけ忘る日の盛り

村田武

無造作に花瓶に活ける金魚草
 あちこちに川鶉首出す水面かな
 桑の実をひとつもぎ取り食べてみる
 朝採りの絹莢貫ひ戻りけり
 土手道の草刈あとの匂ひかな
 振花が庭のそこらに殖えてきて
 用水に鯉水際に半夏生

森美佐子

山路きて夏うぐひすのこゑ近し
山本久枝
明易しトラックが出る駐車場
水口の音ちよろちよると花菖蒲
梅雨湿り農家の軒に木の梯子
傘とぢて茅の輪をゆるりくぐりけり
今朝みれば胡瓜の花の数ふえて
溝萩は寺の井戸端近く咲き

湯本正友

畑を起し雨待つ八十八夜かな
庭先の蜜柑の花の香りくる
緑蔭で釣糸たれる親子連れ
朝採りのトマト農家の門前に
葛餅を経木にのせて売る菓子舗
樹の間から薄日漏れくる竹落葉
黒南風に池面の浮子の揺れに揺れ

湯本実

夏めくや盛そば食ひに街中へ
孫の自転車の補助輪外す薄暑かな
柿の花老舗の菓子屋廃業と
テレビ前の昼寝が常の二人かな
峠下れば大水車あり青田風
炎天や経を読む声磴にまで
夏つばき朝風呂を出て庭に立つ

吉田幸恵

この家の木苺熟れてみたりけり
麦ぶえを含み童の顔となり
花みかん数にあまれる匂ひして
新聞のビニール破る梅雨の朝
ほろ酔ひの軽きステップ夏の月
夏蝶やデイサービスの迎へ待つ
道問うてなほ真つ直ぐに行く薄暑

浅嶋肇

萩焼の罅を愛でつつ新茶汲む
遠蛙会話しばらく途切れたる
蔓薔薇をくぐり呼び鈴押しにけり
路地奥に小さなパン屋薔薇香る
墓を前に日傘とりどり集まつて
カラフルな一両電車梅雨晴間
せせらぎの聞こゆる宿の山法師

安齋正蔵

夏座敷掛軸ちよつと揺れ動き
冷酒のコップを握る指太し
親指と人差指にかかると虹
山小屋は雑居寝軒のひと夜なり
近づくけば吸込まれさう瀧の色
思ふことやつと話せて汗ぬぐふ
更衣古き衣がだぶだぶに

石塚清文

武者人形子供の笑ふ声のして
白牡丹塩の盛られし料理茶屋
余花望む峠の茶屋へ辿り着き
おぼろげな母の面影粽食ふ
無住寺の裏庭広し露茂る
五月雨の煙りてあをし平林寺
古代蓮行田經由の秩父線

石原健二

朝の陽に気も新らたまる茗荷汁
亀鳴けり田面静かな日暮れとき
蔓の間に通草の花のかくれ咲き
春の蚊のふはりふはりと地に近く
ひと往かぬ荒れる山道時鳥
出されれば言葉なくなるさくらんぼ
田にありて見上げる森に水木咲く

あめんぼう水の光に浮いてゐる
素麺の泡立つ鍋をのぞき込む
腰すゑてけるけろと鳴く蛙かな
新玉葱の皮の一重の浅みどり
乳与へつつ青葉食む放牧馬
銭湯は午後四時に開く梅雨晴れ間
保育園の遊具カラフル立葵

稲田延子

さわさわと白樺揺する若葉風
いつからか売家となりて柘榴の花
夏霧の晴れて眼下の町しかと
はんなりとした言葉聞く納涼床
法要の寺の軒下蟻地獄
遠山に夏霧のぼりゐたりけり
森昏し花藻の池に雲映り

岩藤礼子

良い方の声でママ呼ぶかたつむり
髪切つて耳の奥まで夏の風
レンズ這ふ蟻がテレビに大写し
白き物嘴より垂らし鳥の子
食はれさうなマスクの金魚梅雨に入る
「草加田圃」わづかに残り夏燕
梅雨長し背表紙読みに本屋まで

江口恵子

野苺のなまあたたかき実を口に
対角に座して定食夏暖簾
雷鳥の親子が見ゆる夕曇り
掛け軸を変へて一息夏座敷
干し終へし白きシートに夏の風
箸置きを変へて朝食水中花
おろしたての雑布ひとつ梅雨晴間

◇ 9月・10月の句会案内

月	日	時	句会名	会場	連絡先
9月	1日(火)	AM9:00	こなから会	あいバル	WEP編集室
	1日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン1	大島英昭
	2日(水)	PM6:00	ぎんなん会	浦和コミセン3	丑久保 勲
	4日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	4日(金)	PM6:00	なごみ会	浦和コミセン3	秋山信行
	19日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	26日(土)	AM10:00	楽天会	あいバル	廣瀬雅男
	26日(土)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室
10月	2日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	2日(金)	PM6:00	なごみ会	浦和コミセン3	秋山信行
	5日(月)	PM6:00	ぎんなん会	浦和コミセン4	丑久保 勲
	6日(火)	AM9:00	こなから会	あいバル	WEP編集室
	6日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン4	大島英昭
	17日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	18日(日)	AM10:00	吟行会(下記注)	皇居・二の丸公園	丑久保 勲
	24日(土)	AM10:00	楽天会	あいバル	廣瀬雅男
	24日(土)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室

(注) ぎんなん会は奇数月は第1水曜、偶数月は第1月曜です。

10月18日(日)の吟行。集合は10時。

集合場所は皇居・大手門前。

吟行地は皇居・二の丸公園。

句会場は森下文化センター。

◎連絡先

秋山信行	☎048-874-0555	藤井美晴	☎0422-55-2733
大島英昭	☎048-592-5041	WEP編集室	☎03-5368-1870
廣瀬雅男	☎048-443-7522	丑久保 勲	☎048-853-3856